特色ある取組を行っている学力フロンティアスクールの事例

（別紙様式＝小学校用）

都道府県番号	３８
都道府県名	愛媛県

【① □　　②■　　③ □　】
＊重点をおいた観点にチェックすること

Ⅰ　学校名及び規模

学校名	八幡浜市立白浜小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	２	２	２	２	１４	２３
児童数	５４	４３	５１	５６	４３	４５	４	２９６	

Ⅱ　研究の概要
（１）　研究主題

確かな学力を身に付け、主体的に取り組む児童の育成
～算数科における指導法の工夫を通して～

（２）　研究主題設定の趣旨

本校の児童は、算数科において意欲的に学習に取り組んでいる。しかし、学力の実態をとらえてみると、基礎・基本の段階でつまずいている児童が多く、個人差に応じた指導をきめ細かにしていく必要があった。そこで、児童の実態をより的確に把握し、個に合った指導の工夫や教材開発に努めることにより、わかる・できる楽しい授業を実践し、確かな学力を身に付け、自分に自信をもって何事にも主体的に取り組もうとする児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

Ⅲ　研究の概要
（１）　研究推進体制の工夫

学団部会 ― 研究部会 ― ブロック部会

部	個を伸ばす研究部会	授業研究部会	啓発部会
研究内容	○　実態把握 ・　意識調査 ・　学力テスト ・　チェックテスト ○　まなびタイムの実施 ○　学習形態の工夫 ○　評価研究	○　学習における基礎・基本の徹底 ・　ノート指導 ・　話し方 ○　教材の工夫開発 ・　算数的活動の生かし方	○　保護者への啓発 ・　フロンティア新聞 ・　学習形態の説明 ・　公開授業 ・　保護者アンケート ○　家庭学習の習慣化 ○　教育環境整備

（２）　研究の実際
ア　個に応じた指導のための指導体制の工夫
（ｱ）少人数指導の体制の確立
今年度より、少人数指導（３～６年）、少人数指導とＴ・Ｔ指導（１・２年）の新しい指導体制のもと、学習が始まった。まず、学習を進めるに当たり、以下のように少人数指導の体制を確立して、指導に当たるようにした。

○　各学年の算数科リーダー教師を決め、その教師が中心となって、日々の指導案を作成する。
○　その時間にその学習集団で押さえるべき内容と、重点評価項目をしっかりと共通理解して授業に臨む。
○　授業後、指導者が話し合う時間を設定し、その日の評価をもとに、次時の支援の見通しを持つ。

（ィ） ねらいに応じた学習形態

実際に少人数指導・ＴＴ指導を実践してみて、明らかになってきた少人数指導とＴＴ指導の良い点と課題として残る点を教職員で共通理解を図った。その上で、それぞれの単元のねらいが、より効果的に達成できるよう学習形態を考え、年間計画を作成した。作成する上では、特に次の２つのポイントに焦点を当てた。

○　基礎・基本の定着を重視した学習に効果的な学習形態の在り方

○　数学的な考え方を育成することを重視した学習に効果的な指導の在り方

少人数指導の長所	少人数指導の課題
・　人数が少なくなることで、個別指導や補充学習が充実し、学力の向上につながる。 ・　各選択コースで、児童の実態に合わせた学習内容や方法を工夫し実践できる。 ・　発表の機会が多くなり、学習意欲が向上する。 ・　少人数の中での発表は、緊張感が減り、発表が苦手だった児童が、発表しやすい環境になる。 ・　数名の教師が、教材研究を行うことにより、学習内容が充実し、評価についての共通理解が図りやすい。	・　児童の人数が少なくなることにより、多様な考えがでにくい。課題解決をして、自分の考えを発表し、練り合い・高め合う力を付けるための学習集団の編成の仕方を研究していく必要がある。

ＴＴ指導の長所	ＴＴ指導の課題
・　Ｔ１の教師が主に授業を進め、Ｔ２の教師が支援と評価に当たるというふうに役割を決めた。Ｔ２の教師は、一人一人の児童が把握しやすく、つまずいている児童には、タイミングを逃さず支援したり、支援に生きる評価ができる。 ・　人数が多いと、それだけ多様な考えがでやすい。友達の多様な考え方に刺激を受け、お互いが高まっていける。	・　Ｔ２の教師が、「ヒントコーナー」で、つまずいている児童の支援を行った。問題の意味を把握する上では、効果的であったが、自分で考えようとする態度が、やや薄れてきていた。支援の在り方をより工夫してく必要がある。

＜ねらいを明確にした学習形態の年間計画＞　～１学年

月	単元名（時数）	学習形態	コース編成の意図	人　数	指導者
9	２０までの数 （７）	少人数指導 （人数均等による）	２０までの数の概念・読み方・書き方の基礎・基本を押さえる単元。操作活動を通して、具体物や半具体物、数字を互いに関連づけて指導するため、少人数指導できめ細かな指導をする。	１組１３ １３ ２組１３ １４	A C B C
9 １０	ながさくらべ （３）	ＴＴ指導	作業的な算数的活動を通して、長さの観念を養う単元である。子どもの多様な考えを大切にしながら、理解を深めていく場面であるため、学級単位でＴ・Ｔ指導を行う。	１組２６ ２組２７	Ｔ１ Ｔ２ Ｔ１ Ｔ２
１０	３つの数の計算	少人数指導 （習熟度別による）	具体的な場面を理解した上での問題解決になる。数図ブロックを操作しながら答えを求めていくので、正しく操作できているか確認する。たし算・ひき算がまだ正確にできない児童は、ゆっ	１組 にこにこ　６ ぐんぐん２０ ２組 にこにこ　６ ぐんぐん２１	C A C B

ィ　個に応じた指導の工夫

（ア）学力テスト・チェックテストによる実態把握

学年末に学力テストを実施し、その結果を分析することにより、各学年の指導の重点化を図っている。全体的に見ると５段階の児童はやや少ないものの、４段階の児童は比較的多い。しかし、１・２段階の児童も少なくはなく、基礎・基本の段階でつまずいている児童の実態が明らかになった。

そこで、どの学年のどの内容でつまずいているのかをさらに詳しく把握するために、数と計算領域に限り、１年から６年までの内容のチェックテストを作成した。

チェックテスト実施後、つまずいている内容を個人カードに記入している。このチェックテストは、期間をおいて何度も実施し、児童一人一人の変容を把握するようにしている。

（ィ）「まなびタイム」の充実

毎日 10 分間の「まなびタイム」を校時表の中に位置付け、数と計算領域の習熟を図っている。その時に習っている内容の習熟を図ったり、チェックテストで把握したつまずいている内容までさかのぼって、繰り返し練習したりすることにより、基礎・基本の確実な定着を目指している。

このとき、少人数指導の教員は、個別指導を要する児童の指導にあたっている。

（３）　研究の成果と課題

ァ　成果

少人数指導において、まず、学習内容により、どのような学力を児童に身に付けさせたいかを明確にした。その学力を身に付けさせるためには、どのような少人数指導の形態で取り組めば学習効果が上がるか、また、支援に生かす評価・評価の積み上げはどのようにすればよいか、教師間で十分話合いを持って計画的に学習を進めていった。それにより、児童一人一人の実態に応じたきめ細かな指導ができ、成果が上がった。学習後の単元テストにおいても、全体的に点数が向上するとともに、「算数がとても好き・好き」と答えた児童が 10%程度増えている。文章題を解くことや、解き方の説明に対する苦手意識を持った児童も、各学年少しずつ減ってきている。この結果からも、児童が分かる喜びを実感し、考える力が育っていることが分かった。

ィ　課題

指導体制が整い、少人数指導のよさを生かすことができ始めているが、より効果が上がるように、研究を積み重ねていく必要がある。特に数学的な考え方の育成という点では、まだまだ課題が大きいので、今後、より研究を深めていく必要がある。また、少人数指導を行っていくための日々の教師間の情報交換等の時間を能率よく確保し、効果的な指導へとつなげていきたい。

基礎・基本の定着は図られ、成果は上がっているが、時間が経過すると定着が図られていた学習内容ができなくなっていたという児童がいた。学習を振り返って繰り返し学習していくことを大切にし、確かな学力へとつなげていきたい。

（４）　研究成果の普及の方策

・ 学力向上フロンティア事業地区協議会を通して、研究の成果や今後の方向性などに関する情報交換を行った。
・ 宇和島管内・八幡浜管内のフロンティアティーチャー交流研修会において研究実践の情報交換を行った。
・ 第２回学力向上推進協議会において、研究発表を行い、本校の取組を紹介した。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☒　１４年度からの継続校

【学校規模】　□　６学級以下　□　７～１２学級
☒　１３～１８学級　□　１９～２４学級
□　２５学級以上

【指導体制】　☒　少人数指導　☒　Ｔ．Ｔによる指導
□　一部教科担任制　□　その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　☒　算数　□　理科
□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭
□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☒　有　□　無

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】

○　少人数指導やチィーム・ティーチングの長所や課題を明確にしたうえで授業計画を立てるなど、理論に裏付けられた実践が行われている。
○　チェックテストを工夫して児童のつまずきを把握し、それを学習指導の改善に生かすなど、きめ細かな指導が行われている。